

朝日歌壇

第42回 朝日歌壇賞

2025年の入選歌から選者4人が1首ずつ選びました。賞状と記念品が受賞者に贈られます。

永田和宏 選

癌に臥す妻の細髪洗いおりて我は悲しく勃
起せしなり
(狭山市) 奥園 道昭



妻が亡くなったのは三
十六年前です。その翌年
に短歌を始めました。こ
の歌ができたのは去年で
す。歌になるまでこれほどの時間が経った
心の不思議を思っています。

《評》病む髪を洗いつつ、思わぬ性の衝
動に狼狽える。深き愛の噴出を恥じる裏。

川野里子 選

「生きるため死体の上を歩いたの」ばあ
ちゃんに僕が出会えた理由
(筑後市) 近藤 史紀



誰かと一緒に歩いてくつて
のも、いいものだ最初
に教えてくれた人との歌
での受賞、素敵な誕生日
プレゼントになりました。ありがとうござ
いました。

《評》壮絶な祖母の言葉と、それを背負
い、自らに引き寄せた力の均衡が見事。

佐佐木幸綱 選

牧場の牛の爪切り依頼せし獣医ベットの山
羊連れて来る
(沼津市) 石川 義倫



牧場の辺りを散歩して
いる時、友人が言った。
「あそこを草を食べてい
る山羊、牛の爪切りして
いる獣医のベットで、いつも一緒に来るん
だぜ」。何だか嬉しくなりました。

《評》ペットの山羊をつれて現れた獣医
さん。彼の人柄が見えるような一首です。

高野公彦 選

安青錦物の見事な「内無双」母国は戦火に
包まれながら
(川崎市) 宇藤 順子



「サラダ記念日」を詠
んで短歌を作りはじめ、
生活や介護に追われ二十
数年中断して再開しまし
た。続けていて良かったです。ちなみに最初
に選んで頂いたのも高野先生でした。

《評》母国が戦火の中にあるのに、日本
に来て活躍する安青錦への称賛と同情。

永田和宏 選

魯迅と藤野先生ならび居て視線を受けつつ入
る図書館
(仙台市) 浅川 照夫

「働きて働きて病む秋の暮」仁科芳雄は辞世
句遺す
(藤枝市) 市川 篤

給食費小銭ばかりで持ってきた児童の腫卒業
の朝
(吉野川市) 喜島 成幸

早世の友の息子よ父さんを看に吞もうかしこ
れ降る夜は
(浜松市) 久野 茂樹

この電話切ったあととときと姉も泣いているひ
とりになつてしましいいまま
(帯広市) 小矢みゆき

過多は駆除稀少は保護と人間の基準で分けら
れ熊と熊猫
(和歌山市) 貴志 眞澄

夕焼の金網フェンスに残されてだれも取らな
いそのカラスウリ
(大津市) 阪倉 隆行

少しずつ少すつあともとりしてやがてあや
ましくりかえすでしょう(東京都) 無京 水彦

もう次はないと思いつまた来るわまた嘘つい
た最後のウソを
(木津川市) 山中麒比子

体調を気遣うようなやさしさで次の締め切り
催促している
(大阪市) 加藤 成和

【評】浅川さん、「藤野先生」を書いた魯迅とその恩師藤野厳九郎の胸像が、東
北大学図書館に並んでいる。市川さん、日本の現代物理学の父とも言われる仁科芳
雄。例の「働いて働いて」からの連想。十首目、私もいつもそんな風に催促される。

川野里子 選

針のない時計に針を探しおり緩和ケアの実習
終えて
(東京都) 里見 脩一

冬の警備に立つたび想う春先の雪夜の歩哨に
立ちしう祖父
(船橋市) 小野口公也

駆けつけて棺の友と対面す五十年來会話途切
れず
(仙台市) 畠山 正博

抱え帰るポインセチアの炎を揺らし夕闇迫る
我が家への道
(豊田市) 小田中真秀

思い出すたびみなして笑い合うけんかけん
かけんかの旅行
(横濱市) 富尾 大地

吠より店の櫓へと移す塩湿り集めて光りてあ
たり
(多摩市) 豊間根則道

声を張り線路挟んで駈奔る夜のしき気まず
さ入り混じりつつ
(流山市) 汐入 音佳

オフィスでは隣の人からメール来る声も掛け
ずに目も合わずに(さいたま市) 萩谷 則子

わたしには手の届かない人だから今日も見て
るだけ 皇帝タリヤ (相模原市) 榎本 ハナ

佐賀関大火災に漁師はなげく関鯛の一本釣りの
釣具具焼けしを
(大分市) 岩永 知子

【評】一首目、残り時間を知らせない配慮の病室の時計に時刻を探す。二首目、
寒く危険な任務に立った祖父の心を感じる。三首目、亡き友との会話が途切れぬ。六
首目、伝統的な製法の塩の表情が美しい。十首目、一番の財産は釣り具だった。

佐佐木幸綱 選

何十年も暮らした家だ見えずとも暮らせる
妻手術を前に
(四国中央市) 石川 明憲

火の気無き仏間に朝の経を誦むわがルーティ
ーン猫が見守る
(酒田市) 今井 喜代

バスに乗り船に乗りバスに乗り新幹線に乗つ
て佐渡より母来る年の瀬
(さいたま市) 齋藤 紀子

鴨一羽群れたる鰯に混じりて仲違ひせず餌
を分け合ふ
(熊本市) 貴田 雄介

競馬好きの夫の戒名に駿が親族皆で和む
法要
(旭川市) 齊藤 洋子

ブラインド上げれば曇りガラスかと思紛うま
でに雪降り止まず
(五所川原市) 戸沢大二郎

ラッパ吹き豆腐を売った時代には豆腐一丁に
もドラマがあつた
(川崎市) 宇藤 順子

ひとつだけバツタンだったと不満顔「小川」
の右に「ちいかわ」とあり(富谷市) 川村 空也

ここだけは異次元空間楽し気な町の病院産科
の前は
(香川県) 藤井 哲夫

タッチ機に戸惑う人の奇立ちが背に伝わりて
声かけそびる
(京都市) 清水 希

【評】第一首、目の手術を受ける妻。「何十年も暮らした家だ」が妻の思いを表現
して重くひびく。第二首、真冬の早朝の仏前の読経。「猫」が作者の日常を象徴し
て、うまい。第三首、佐渡から埼玉まで。乗り継ぎを列挙して特色を出している。

高野公彦 選

見上げれば風車、見渡せばメガソーラー都会
を支える過疎地の景観 (札幌市) 田巻 成男

焼夷弾ごんな物かと問う我に訥々と語る父の
嗚声よ
(太田市) 岡島由美子

マスクして年齢不詳のつもりだがシニア割引
しますと言わる
(仙台市) 小野寺寿子

のどかなる雪野に思ふ異国には軍靴の散らす
雪のあること
(南魚沼市) 木村 圭

「家をどう飾るかよりも守るかにせよ」スキ
ーがクリスマスに言う(観音寺市) 篠原 俊則

国技なれど海外力士の優勝に祖国の国歌を聴
かせたきもの
(東京都) 漆原 静枝

スパーで右手袋を落としたがカート置き場
に誰か置いてた
(諫早市) 井石 昭子

枚数は減るが毎年賀状出す生きていますよ生
きていますか
(取手市) 緑川 智

ほのぼのと子らと歌ってきたけれど歌えなく
なった「森のくまさん」(山口県) 庄田 順子

大谷を見習ひ出来る唯一のことは黙つてゴミ
拾ふこと
(村上市) 鈴木 正芳

【評】1首目、都市部で消費する電力を過疎地で産出していることへの違和感。
2首目、「嗚声」という語が戦争への非情さを浮かび上がらせる。3首目、あらバ
レちゃった、というユーモア短歌。4首目、日本より北のウクライナを想う歌か。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メデ
ィアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。
投稿は無地のほか1枚に1作品、未発表の自作のみ。
作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104
・8061 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、
俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削
する場合があります。